

## 遺物について

これまで土器・石製品・木製品などがコンテナ箱（長さ 54 cm・幅 34 cm・深さ 14 cm）で 1000 箱以上出土しています。新潟県内の古墳時代の遺跡からの出土量としては、非常に多い量になります。単に遺物の出土量が多いばかりでなく、新潟県内外のさまざまな地域との交流や、遺跡で暮らしていた人の身分や立場を表す遺物、遺跡内で生産活動を行った痕跡を示す遺物もあります。交流関係を示す遺物には土器があります。古墳時代前期には、瀬戸内方面や畿内といった西方との交流がみられるものや、<sup>ぞくじょうもんどき</sup>統縄文土器とよばれる北方との交流を示すものがあります。身分や立場を表す遺物には、<sup>かぶつちのたち</sup>勾玉や<sup>つかがしら</sup>管玉などの玉類、<sup>つがしら</sup>頭椎大刀の柄頭などがあります。頭椎大刀の柄頭は、古墳時代後期のものと思われませんが、豪族などの有力者が所有するものであり、遺跡内に有力者が住んでいたか、もしくは遺跡内の活動に関わっていた可能性を示しています。生産活動を示す遺物には、<sup>てつかじ</sup>鉄鍛冶に関するもの（<sup>はぐち</sup>羽口・<sup>といし</sup>砥石・<sup>かじさい</sup>鍛冶滓など）、<sup>ぼうしよく</sup>紡織に関するもの（<sup>ぼうすいしや</sup>紡錘車）、石器製作に関するもの（<sup>せきかく</sup>石核・<sup>はくへん</sup>剥片・スクレイパーなどの製品）があります。

今年度の調査では、遺構内の埋土を採集して洗浄した中から微細な遺物を取り出す作業を行った結果、剥片石器など石器製作に関する遺物が多く発見されました。その多くは、スクレイパーとよばれる皮なめしに使用したと考えられている石器に関わるものでした。古墳時代のスクレイパー製作は、北海道から東北地方にかけて多くみられます。石港遺跡から北海道を中心に分布する統縄文土器が出土していることから、北方との緊密な交流が認められます。



はじき  
土師器（搬入土器や模倣土器）  
\* 石川県以西の特徴が見られる



土師器（古墳時代中・後期）



スクレイパーと統縄文土器



石器製作施設から出土した遺物



勾玉・垂玉・管玉



石製模造品・管玉・紡錘車



鉄鍛冶関連遺物



頭椎大刀の木製柄頭

## まとめ

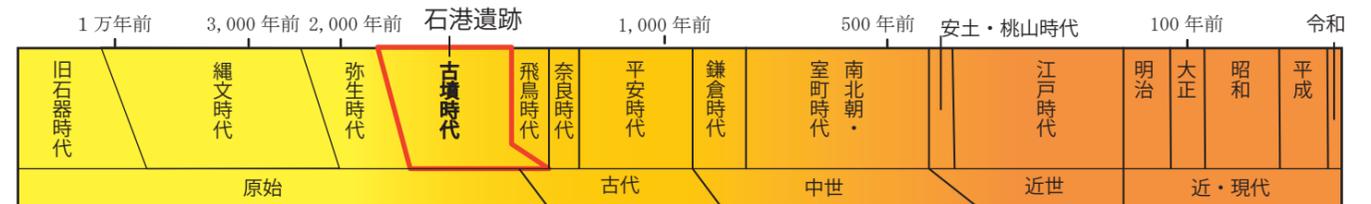
4 年間に及ぶ調査の結果、石港遺跡では県内初となる方形区画施設の検出や、頭椎大刀の柄頭の出土など、遺構・遺物ともに重要な発見がありました。遺跡は、海上交通に適した日本海に面し、旧流路を利用した内水面の利用も可能な利便性の高い地に残されていました。また、付近に古代の北陸道の駅家である『<sup>うまや</sup>渡戸駅』が置かれていたと想定されていることから、陸路の利用も可能な地だったと考えられます。このように、当地が地域間交流や交易を行う上で物資の搬入出に適していたことが、遺跡内でさまざまな地域の遺物が出土し、盛んに生産活動が行われた理由と思われる。石港遺跡で生活した人々が、交通網を生かして周辺地域と活発に交流したことが、長期間遺跡が存続した理由のひとつと考えられます。



調査区遠景（南西から市街地を望む）

No. R5. 6/15 撮影

## 日本の時代年表

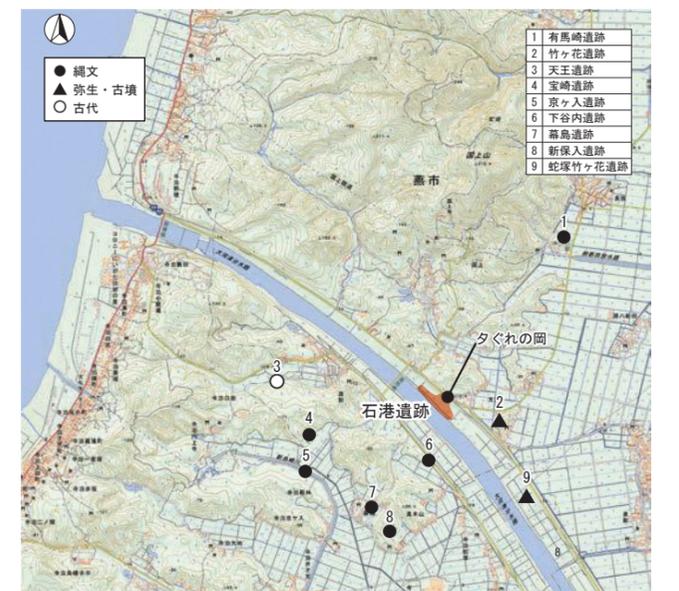


## 遺跡の概要

石港遺跡は、燕市渡部に所在し、河川大規模災害関連事業に伴う発掘調査を令和 4 年度から実施しています。今年度は、4,508 m<sup>2</sup>を対象に調査を実施中です。

遺跡は信濃川大河津分水路右岸に位置し、標高 11m 前後の埋没丘陵と沖積低地に立地します。遺跡の範囲は南北約 230m、東西約 350m に及びます。

これまでの調査で、弥生時代中期（約 2,100 年前）と古墳時代前期から後期（約 1,700 ～ 1,500 年前）にかけて営まれた集落であることがわかりました。石港遺跡の調査成果のひとつに、柵または塀で居住地を囲む首長居館とよばれる方形区画施設の発見があります。今年度の調査では、区画に合わせて大・小の建物が計画的に配置された状況が見えてきました。また、区画施設が構築された時期以外にも大型の建物が建てられ、周りに小型の建物が配置されていた様子がみられます。調査が進む中で古墳時代の集落の姿の一端が明らかになりつつあります。



国土地理院 電子地形図 25000 「新潟」使用  
遺跡位置図

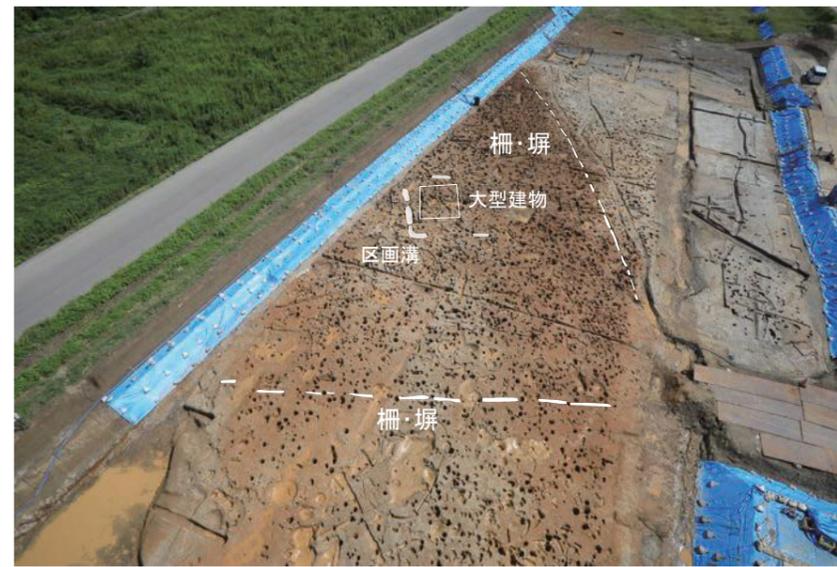
## 遺構について

4年間の調査で、石港遺跡では古墳時代前期から後期まで、約350年間ほぼ継続して集落が営まれていたことがわかりました。調査区内には古墳時代に丘陵際を蛇行しながら流れていた流路が見つかっており、流路を生活に活用しながら暮らしていた様子がうかがえます。調査で見つかった遺構を見てみると、時期ごとに遺構の種類や構成に特色があることがわかってきました。

古墳時代前期は、前半段階では低湿地と居住空間を分けるように溝を掘削し、居住域には大型の平地建物を中心にまわりに平地建物や掘立柱建物が建てられていたようです。

前期の後半段階から末頃は、大きな注目を集めた方形区画施設が構築され、集落の様子が様変わりします。方形区画施設内には、区画の方位に合わせて建物が建てられます。集落の核となるような大型の建物の周りは溝で方形に区画されるようです。また、この時期東北から北海道にかけて多く見ついているスクレイパーと呼んでいる石器の製作施設も見つかっており、この時期に区画内の一角で石器製作が行われた可能性もあります。

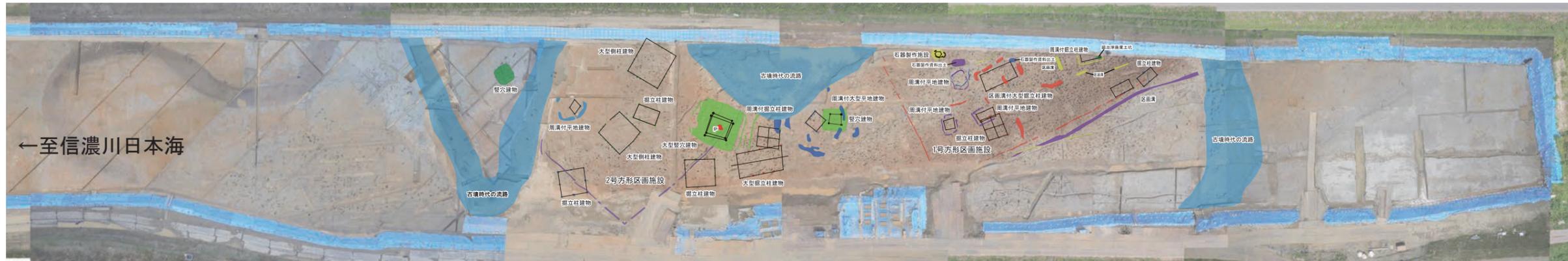
古墳時代中期以降は、方形区画施設がなくなり、建物も平地建物から竪穴建物に変化します。後期になると壁立式建物とよばれる建物も建てられるようになります。大型の建物が建てられる点は、前期と同様です。時代とともに大型建物も含めて主要な住まいの形態が変わっていくことが、石港遺跡の大きな特徴のひとつになっています。



1号方形区画施設全景（西から）  
長さ2m程の溝をときれときれにつなぎながら柵か塀を構築した様子がわかります



方形区画施設の構造  
方形に掘り込んだ溝の底に杭を打ち込むか柱を立て構築しています



石港遺跡の主な遺構の配置状況



区画溝遺物出土状況



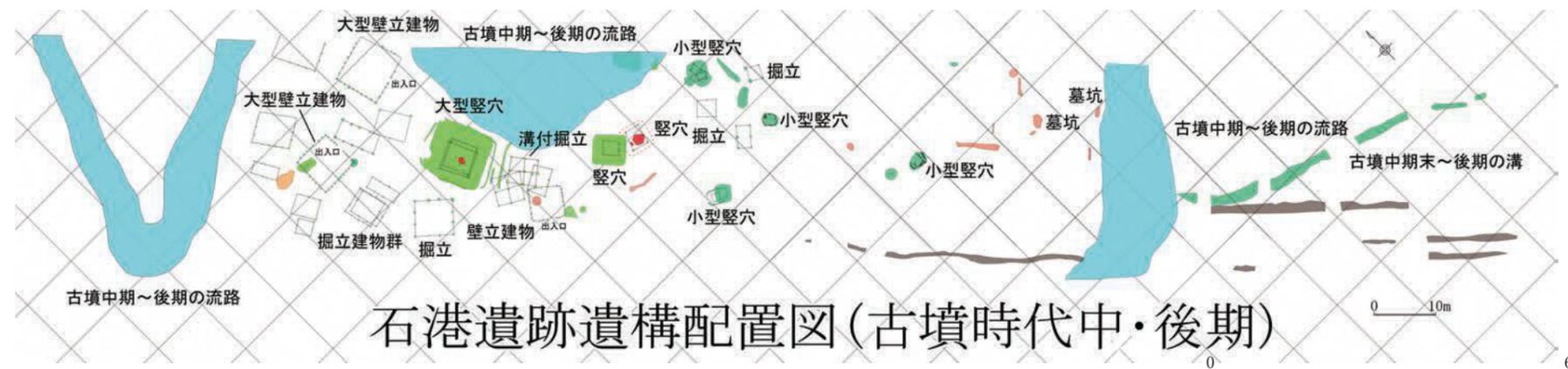
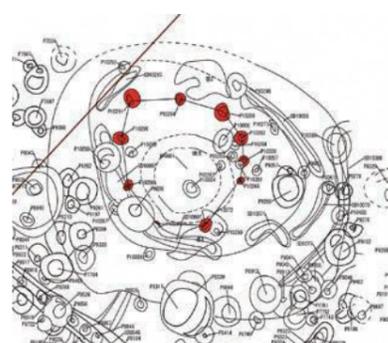
周溝付大型平地建物



石港遺跡遺構配置図(古墳時代前期)



石器（スクレイパー）製作施設（古墳時代前期末頃）



石港遺跡遺構配置図(古墳時代中・後期)